

大学入学共通テスト「情報」導入に対する
受験生の意識と受験対策の実態

小玉 淑乃† 小野 永貴‡

筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類† 筑波大学 図書館情報メディア系‡

1. 背景・研究目的

令和 4 年度から高等学校で必修化された「情報 I」は、プログラミングやデータ活用などの内容が新たに加わり、令和 7 年度からは大学入学共通テスト(以下、共通テスト)での出題科目となった。「情報」の得点は多くの国公立大学で使用されることが公表され、「情報」を受験する受験生も多数であると考えられる。

共通テスト「情報」導入の決定を受けて様々な調査がなされているが、大学受験生に特化した研究はほぼ行われていないのが現状である。そこで本研究は、令和 7 年度共通テストで「情報」を受験する生徒(高校 3 年生と浪人生)を対象に、受験対策の実態と意識を明らかにすることを目的とする。特に本発表では、他の関連研究では言及が少ない「情報」の学習手段の現状、「情報」導入に伴う受験校選択への影響および変化、「情報」に対する難易度の感じ方・理解度における性差を解明することを目指す。

2. 先行研究

赤澤ら[1]は、高校生の大学進学率と高等学校における「情報 I」の開講学年との関連を分析した。結果、大学進学率が高い地域では「情報 I」を 1 学年で開講する割合が高い傾向が示されている。櫻井ら[2]は、2023 年 12 月に高校 1～3 年生へ調査を行い、特に高校 2 年生が情報科への不安感が大きい実態を明らかにしている。

3. 研究手法

高校生に向けた質問紙調査を行った。「LINE リサーチ プラットフォーム」を利用し、オンラインアンケートとして実施した。同プラットフォームの「1 問スクリーニング」機能を用いて、2025 年 1 月実施の共通テストで「情報」を受験すると回答した者を本調査の対象とした。調査

実施日は 2024 年 11 月 22 日～26 日である。本調査は、筑波大学図書館情報メディア系研究倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号 24-93)

本調査では合計 2327 名の回答が得られ、このうち欠損や矛盾のある回答を除外し、最終的に 1454 名の回答を分析対象とした。質問項目の概略を表 1 に示した。なお性別については自動収集されるため、設問からは省いている。

表 1 アンケート質問項目の概略(選択肢は省略)

Q1	あなたの学年を教えてください
Q2	受験する予定の入試区分を教えてください
Q3	受験する大学で、共通テスト「情報」の得点が使用されますか
Q4	高等学校で使用している「情報 I」の教科書を教えてください
Q5	通っている高等学校で、「情報 I」の受験対策は実施されていますか
Q6	「情報」の受験勉強ではどのような学習方法をとっていますか
Q7	高等学校の授業以外に使用している学習教材・学習手段を上位 3 つまで回答してください
Q8	受験勉強としての「情報」にかかる勉強時間は受験勉強全体にかけている時間のうち何%ですか(直近 1 ヶ月の状況)
Q9	あなたは共通テスト「情報」の内容に対して、どの程度理解していると思いますか
Q10	「情報」の中で苦手だと感じる単元・内容は何か
Q11	共通テスト「情報」の勉強は、受験勉強全体においてどの程度優先して進めていますか
Q12	共通テスト「情報」は、対策が難しいと感じますか
Q13	共通テスト「情報」の受験対策ならではの悩みについて教えてください
Q14	「情報」を受験科目として勉強する中で、受験校について影響がありましたか
Q15	勉強に使用することができる機器の所持状況を教えてください

4. 調査結果および考察

直近 1 ヶ月における「情報」の受験勉強時間の割合を尋ねた Q8 は、平均値が 3.7%、中央値が 2%との結果であった。「0%」の回答が 517 件(35.6%)あり、受験が迫る秋の段階でも勉強時間が十分に確保されていない実態が確認された。受験勉強における「情報」の優先度への意識を尋ねた Q11 でも、「全く優先していない」という回答が 690 件(47.5%)あり、他の教科の勉強が優先されている状況が示唆された。

高等学校における「情報 I」受験対策の実施状況について尋ねた Q5 では、「朝や放課後、長期休暇に補習授業が実施されている」が 415 件と最多であり、「選択科目として「情報 I」対策科目が設置されている」が 313 件と続いた。

Students attitudes and exam preparation toward the new subject Information of Common Test for University Admissions

†Yoshino Kodama, College of Knowledge and Library Sciences, School of Informatics, University of Tsukuba

‡Haruki Ono, Institute of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

しかし「実施されていない」が 307 件(23.2%)を占めていた。Q5 は複数回答可能の設問であるため、「実施されていない」以外の選択肢の選択数を高等学校の受験対策種類数として集計した。その後、受験対策種類数と理解度の自己評価を尋ねた Q9 の結果について、クロス集計およびカイ二乗検定を行ったところ、表 2 の通り 1%水準で有意となった。また、残差分析を行った結果も表 2 に示した。調整済残差の絶対値が 1.96 を上回ったセルは灰色で示している。受験対策種類数が 0 である回答者は、「十分に理解している」「理解している」と回答した者の割合が有意に少なく、また「全く理解していない」と回答した者の割合が有意に多いことが示された。

表 2 高等学校での「情報」受験対策種類数と理解度の自己評価間のクロス集計

		Q.9 あなたは共通テスト「情報」の内容に対して、どの程度理解していると思いますか。						
		十分に理解している	理解している	どちらともいえない	理解していない	全く理解していない	合計	
$\chi^2=73.093, p<0.001$								
高等学校における「情報」受験対策種類数	0 種	度数	29	107	92	39	40	307
		調整済残差	-2.1	-3.3	0.4	1.5	7.8	
	1 種	度数	103	326	229	82	18	758
		調整済残差	0.9	0.0	1.2	0.6	-4.7	
	2 種	度数	28	95	42	12	4	181
		調整済残差	1.1	2.8	-1.8	-1.8	-1.7	
	3 種	度数	8	34	16	4	1	63
		調整済残差	0.0	1.8	-0.6	-1.1	-1.2	
	4 種	度数	3	8	5	1	0	17
		調整済残差	0.6	0.3	0.0	-0.6	-0.9	
	合計	度数	171	570	384	138	63	1326

※全体の選択肢は「朝や放課後、長期休暇に補習授業が実施されている」/「選択科目として「情報 1」対策科目が設置されている」/「情報科の先生が個別に対応している」/「受験対策用のプリントなど教材が配布される」/「その他／実施されていない」。選択された種類数の最大値は 4 種であり、5 種以上の回答は 0 件であった。※浪人生は、調査実施時点で高等学校に所属していないため、このクロス集計からは除外している。

また Q7 で「情報」自習時に使用している教材を自由回答形式で尋ね、明らかな誤字・表記揺れと見られる回答の修正及び質問意図にそぐわない回答の削除を行い、782 件を有効回答として集計した。最も回答が多かった教材はオンライン学習サービスの「スタディサプリ」(53 件)で、その他は学校が用意した教材や市販の参考書、学習塾の名称が上位であった。また、「YouTube」や具体的な YouTube チャンネルを挙げた回答が計 56 件と、有効回答の 7.1%を占めた。櫻井ら[2]の先行研究は、調査実施段階では令和 7 年度の共通テストを受ける生徒はまだ高校 2 年生であり、本格的な受験対策を行う前の生徒たちの意識が収集されている。そこで櫻井らが実施した調査(以下 2023 年調査)と同様の質問項目を今回実施した調査(以下 2024 年調査)の Q14 に設置し、比較・集計を行った。結果は表 3 に示す。2024 年調査は 2023 年調査と比較して「情報」の受験が必要な大学を進学先へ考えるという割合が増え、「情報」の受験が必要な大学を避けるようになったという割合が減少した。

表 3 「情報」が受験校選択に与えた影響の比較

2023 年調査: 2025 年度(現高校 2 年生以降)、大学入学共通テストに「情報」が採用されます。このことは、あなたの考えや行動に変化をもたらしましたが、2024 年調査: 「情報」を受験科目として勉強する中で、受験校について影響がありましたか。	2023 年調査 件数・割合 (n=300)	2024 年調査 件数・割合 (n=1454)
2023 年調査: 「情報」の受験が必要な大学を進学先として考えるようになった 2024 年調査: 情報が必要な大学の受験に前向きになった	16 5.3%	124 8.5%
2023 年調査: 「情報」の受験が必要な大学を進学先として避けるようになった 2024 年調査: 情報が必要な大学の受験を、避けるようになった	46 15.3%	57 3.9%
特に変化はない	177 59.0%	1104 75.9%

※設問や選択肢の表現を修正したため、異なる場合は上段に 2023 年調査、下段に 2024 年調査の選択肢を示した。
※櫻井らによる 2023 年調査の数値は、「高校 2 年生の大学・短大進学志望者」に限定した集計結果である。

性差の検証では、Q12 の回答を男女別に集計し、カイ二乗検定を行ったところ、表 4 の通り 1%水準で有意であった。さらに、残差分析を行った結果、調整済残差の絶対値が 1.96 を上回ったセルは灰色で示した。共通テスト「情報」の対策に対し、「とても簡単だと感じる」・「簡単だと感じる」は男性の回答者の割合が有意に多く、「難しいと感じる」は女性の回答者の割合が有意に多いことが明らかとなった。

表 4 性別と難易度の感じ方間のクロス集計

		Q.12 共通テスト「情報」は、対策が難しいと感じますか					合計
		とても簡単だと感じる	簡単だと感じる	どちらともいえない	難しいと感じる	とても難しいと感じる	
男性	度数	109	223	237	191	73	833
	調整済残差	4.9	4.0	-1.3	-5.0	-0.9	
女性	度数	33	111	197	217	63	621
	調整済残差	-4.9	-4.0	1.3	5.0	0.9	
合計	度数	142	334	434	408	136	1454

5. 結論・今後の展望

受験生の意識として、2023 年調査との比較で「情報」を課す大学の受験を前向きに捉える意見が昨年よりも増加していたことが示された。受験対策の実態に関しては、「情報」の受験対策が充実している学校とそうでない学校があり、特に受験対策を全く行っていない学校の生徒の「情報」理解度が低くなる傾向が明らかになった。自習においては、オンライン学習サービスや市販の参考書だけでなく、無料で視聴できる YouTube 上の動画等を使用している者が一定数存在することが明らかになった。また「情報」の難易度の感じ方、理解度の自己評価について、男性は「情報」に対して肯定的な回答をする割合が有意に高い一方で、女性是否定的な回答をする割合が有意に高いことが示された。

今後は、学校が行う受験対策の方針や性別など生徒が関与できない要因で進路が左右されることが発生しないよう、情報科の効果的な指導法の検討及び実践に繋げる必要があると考える。

参考文献

[1] 赤澤紀子, 赤池英夫, 角田博保, 中山泰一: 大学進学率に着目した情報科の開講率に関する一考察, 情報教育シンポジウム論文集, Vol. 2024, pp. 320-327 (2024)
[2] 櫻井陽, 小野永貴: 高校情報科に対する高校生の意識調査-関東圏を対象とした不安感の傾向分析-, 情報処理学会第 86 回全国大会講演論文集, Vol. 2024, No. 1, pp. 911-912 (2024)